

鈴鹿峠と坂上田村麻呂

山田雄司

はじめに

桓武天皇の時に征夷大將軍として活躍した坂上田村麻呂は、主に東北地方においてさまざまな伝説を残している。三重県内にも田村麻呂伝説が残されており、多我丸という海賊が鬼ヶ城に隠れて熊野の海を荒らし廻っていたのを坂上田村麻呂が退治したが、そのとき比音山清水寺が建立されたとか、賊の首を地中に埋めその上に大馬神社という神社が建立されたとの伝承を伝えている。

この伝承は地元のみ伝えられ、その起源も江戸時代以前にはさかのぼることができないが、一方近江国と伊勢国の境である鈴鹿峠に関する坂上田村麻呂の伝説は、御伽草子や謡曲にも登場して人口に膾炙し、伝承の成立も古く中世にまでさかのぼるものである。その中の代表的作品である御伽草子『田村の草子』の梗概を示すと以下の通りである。

俊重將軍の子俊祐が、大蛇の化身である美女と契り、日龍丸を儲ける。この日龍丸は七歳で大蛇を退治し、俊仁（利仁）將軍を名乗る。また十七歳で照日前と結婚し二人の姫を儲けるが、照日前を陸奥の悪路王に奪われる。俊仁は鞍馬の多門天から宝剣を賜り、奥州に赴くが、その途中奥州初瀬郡田村郷で賤女と契り、鎬矢を置く。やがて奥州に辿り着いた俊仁は、宝剣で悪路王を退治、照日前を助け出す。

一方、賤女の腹に宿った一子ふせり殿は、やがて成長して鎬矢をもつて都に登り、俊仁と父子の対面を果たし名を田村丸と改め、稻瀬五郎坂上俊宗と名乗る。俊仁は唐土に遠征し敗死。跡を継いだ俊宗田村丸は奈良坂の鬼神を退治し、十七歳で將軍となる。その後伊勢鈴鹿山の鬼神を退治せよとの宣旨を蒙り、天女である鈴鹿御前と契つて、その援助により退治に成功。鈴鹿御前との間に一女を儲ける。その後も鈴鹿御前の助力により、近江の悪事高丸を近江から信濃、駿河、さらには奥州外力浜に追い詰めて退治。鈴鹿御前の命が尽きると、冥界に赴いて連れ戻す。

また、謡曲『田村』の梗概は以下の通りである。

春三月、東国の僧が都見物に出て、清水寺に参詣していると、一人の童子が来て花の木陰を清める。僧はこの童子に寺の来歴を尋ねると、童子は昔賢心という沙門が行叡居士と名乗る観音の化現に遭い、その教えに従つて、坂上田村丸を檀那としてこの寺を創立した由を述べ、且僧に尋ねられるがままに、付近の名所を教えているうちに、月が山の端から出て、この桜に映ずる景色が実に美しい。童子は興に乗じてこの美景を賞賛し、やがて田村堂の内陣に隠れてしまった。僧は奇特の思ひをして、終夜法華経を誦誦していると、その夢に田村丸の幽霊が現れ出て、伊勢国鈴鹿山の凶徒を平らげた軍物語をし、これも観音の仏力であると言つて消え失せる。

さらに東北地方では奥浄瑠璃『三代田村』『二代田村』など話が発展していき、人々はこうした話を通じて坂上田村麻呂の鈴鹿山における賊徒退治について知識を共有していたのである。

本稿ではこうしたことを踏まえ、坂上田村麻呂の鈴鹿山伝承がいかに

に形成されていたのか、大江山の酒吞童子説話と対比させながら明らかにしていきたい。

一 鈴鹿峠の盜賊

近江国と伊勢国との境に位置する鈴鹿山は險阻である一方、東海道という交通の要所でもあることから、盜賊にとつては格好の場所であった。『今昔物語集』卷第二十九の「鈴香山において、蜂盜人を螫殺すこと第三十六」には、京で水銀商をして富を築いた者が鈴鹿峠で八十余人の盜人に襲われた話が記されており、また、伊勢への公卿勅使も鈴鹿峠で襲われたことがあることから、鈴鹿峠は盜賊の出る場所として著名だったことがわかる。

こうした中、十二世紀に成立したとされる一卷本『宝物集』には興味深い記事を載せている。

コノ世ニモナラサカノカナツフデ、ス、カ山ノタチエホウシナト
申物侍ケリ、ヒタカノ禪師海之羊ミナト申ケルヌスヒト、モ、
イツレカツヒニヨクテ侍ル、手キラレクヒキラレ、ヒトヤニ^(金)ニ
テカナシキメヲ^(奈良坂)ノミコソハミナミル事ニテ侍メレ、

これによると、奈良坂の「金磔」と並んで鈴鹿山の「立烏帽子」という盜人が処刑されている。

この立烏帽子については、半井本『保元物語』中卷「白河殿へ義朝夜討チニ寄セラルル事」において、伊賀国住人山田小三郎是行が、自

分は鈴鹿山の立烏帽子をとらえて天皇に献上した山田行秀の孫であることを名乗っている中で示されている。

伊賀国ノ住人山田小三郎是行、生年廿八、指セル人数ニハ候ハネ共、昔、鈴鹿山ノ立烏帽子ヲ擲テ、帝王ニ奉シ山田庄司行季ガ孫也。

戦鬪の際に名乗りに用いられるくらいに、立烏帽子という鈴鹿峠の盜人は、後代においても著名な存在だったことがわかる。山田行秀は堀河天皇のころ（一〇八六—一〇七）に活躍した武将であることから、立烏帽子は十一世紀末の盜人と言える。延文—応安年間（十四世紀中葉）に成立した『異制庭訓往来』にも、

於本朝者、鈴鹿山之立烏帽子、後一条院御宇山城守保昌舍弟保輔、為三強盜張本、蒙追討之旨廿五ヶ度也、

とあるように、日本の盜賊の代表として藤原保輔とともに記されるほど名の知られた人物だったのである。¹⁰ この場合の盜人立烏帽子は、あえて女性とは書かれていないので、おそらく男性だろう。立烏帽子は平安時代の公家の一般的ななぶり物であるが、女性がかぶる場合は白拍子がイメージされる。そして、鈴鹿峠に女盜人がいたことが、立烏帽子を女性とみなすことにつながっていったようである。

『古今著聞集』卷第十二「檢非違使別当隆房家の女房強盜の事露見して禁獄の事」では、見目形のよい若い女性が強盜であったことにみな驚き、昔も鈴鹿山に女盜人がいたと回想している。

きぬかづきをぬがせて、おもてをあらはにして出されけり。諸人みあさまずといふことなし。廿七八ばかりなる女の、ほそやかにて、長だち・かみのかゝり、すべてわるき所もなく、優なる女房

にてぞ侍ける。昔こそ鈴香山の女盗人とていひつたへたるに、ちかき世にも、かゝるふしぎ侍けることよ。

この事件は藤原隆房が検非違使別当であつた時期から考えると、一一八三年から一一九一年までの間とされ、この鈴鹿山の女盗賊と立烏帽子が活動した時期はあまり離れていないため、次第に同一人物とされていったのではないかと推測されている。¹²

鎌倉時代になつても鈴鹿峠は盗賊の出没する場としてよく知られていた。御成敗式目追加法には「鈴鹿山并大江山悪賊事」として、延応元年（一二三九）七月二十六日に、近辺の地頭の沙汰として、鈴鹿山と大江山の悪賊を鎮めるよう命じられている。¹³

また近江国甲賀郡山中の地頭職に任じられ、鈴鹿山の警護を勤めた山中氏に伝来した山中文書にも鈴鹿峠の盗賊に関する記事が散見される。¹⁴それによると、建久五年（一一九四）二月十四日に鎌倉將軍から鈴鹿山往還諸人の安穩のために路地近辺の滋木を伐払うのと同時に、浪人などを招き寄せて山内に居住させ、盗賊の難を鎮めるよう山中氏に命じられている。これをはじめとして南北朝・室町時代に至るまで鈴鹿峠では盗賊が跋扈し、山中氏がその警固役を勤めていたことがわかる。

こうした盗賊が潜伏する鈴鹿峠と坂上田村麻呂とはいかにして関係してくるのだろうか。次に、史実としての田村麻呂に引き続き、伝承上の田村麻呂像がいかに形成されてきたか見ていく。

二 田村麻呂伝説の形成

坂上田村麻呂は天平宝字二年（七五八）に生まれ、弘仁二年（八一）五月二十三日に亡くなつてゐる。¹⁵坂上氏は渡来系氏族倭漢氏の系譜を引き、武人の家であつた。そして、父菟田麻呂は征夷に関わり、陸奥鎮守將軍となつた。田村麻呂の足跡として知られているのは清水寺の建立であり、狩猟の途中に滝のほとりで観音を念じて修行をしてゐた僧行叡に会つて帰依し、堂宇建立に協力したとされる。また、桓武天皇の御代の延暦十年（七九一）七月から延暦十四年正月まで、征夷大將軍大伴弟麻呂のもと、征夷副將軍に任じられたのをはじめとして、延暦十六年十一月から延暦二十年十月までは征夷大將軍として蝦夷討伐に関わつた。そして、延暦二十一年一月には造陸奥国胆沢城使として降伏した阿弓流為・母礼等をつれ入京し、延暦二十二年三月には造志波城使として活躍するなど、古代で最も著名な征夷大將軍である。また、薬子の変に際しては嵯峨天皇側につき、平城上皇軍を押しとどめて事件を終息させた。なお、田村麻呂の二男広野はこのとき固関のため鈴鹿関に派遣されている。

近年田村麻呂の墓所が確定され、京都市山科区の西野山古墓がそれであることが明らかにされた。この場所は滑石越の東の登り口に位置し、東山を越える峠道のうちで平安京羅城門に最もスムーズに接続するルートであり、平安京の東の玄関と位置づけられていた。¹⁶こうしたことから、田村麻呂は死後、平安京の守護者とみなされるようになっていった。平安末から鎌倉初頭に成立した漢文縁起本『清水寺縁起』¹⁷

には次のように記されている。

同廿七日庚申戌二刻葬^{金三五年五月}於山城国宇治郡栗栖村^{今俗呼為栗栖坂}、于^レ時有^レ勅調^二備^一甲冑、兵杖、劍鉞、弓箭、糖塩、令^二合葬^一向^二城東^一立^レ窆、即勅使監臨行事、其後若可^レ有^二国家之非常^一、天下之交難^二者^一、件卿塚墓之内、宛如^レ打^レ鼓、或如^二雷電^一、

西野山古墓の木棺内からは、金装大刀一口、鉄鏃十数本等が発見されており、これが劍鉞、弓箭に相当すると言えるが、甲冑を身につけてはいなかったようである。また、立った姿勢で葬られたとするのは事実と異なる。そして天下が困難な状況に陥りそうなどときには塚墓の中で鼓を打つようなまたは雷電のような音がするという点は、すでにこの時点で田村麻呂が国家に災難が起こりそうなときに怪異を現す存在だと認識されていたことを示している。

これが十六世紀前半に成立した『清水寺縁起』¹⁸になるとさらに話が拡大している。

さて其日庚申戌二刻に当国宇治郡栗栖村^{今俗呼為栗栖坂}にして葬儀あり、然に勅ありて甲冑・劍鉞・弓箭等の兵器を具し棺槨に納之、城東にむかへて堅なからに窆ましむ、猶宣旨云、此後国家に殃難起るへくは、件の塚墓の内、鼓うつことく雷動のことくして、恠相を告よ、又坂東に向はむ者は、先此墓に詣て擁護をこふへきよし諸臣に綸言をそ加へられける、

先の内容につけ加え、坂東に向かう者は、田村麻呂の墓に詣でから赴いたならば、田村麻呂の神霊が擁護してくれるというのである。

この話で思い起こされるのが、京都東山華頂山山頂の將軍塚にまつわる伝承である。『平家物語』巻第五「都遷」には、平清盛による福

原遷都と関係して以下のように記されている。

桓武天皇ことに執しおぼしめし、大臣・公卿、諸道の才人等に仰あはせ、長久なるべき様とて、土にて八尺の人形を作り、くろがねの鎧・甲を着せ、おなじうくろがねの弓矢を持たせて、東山峰に西向きにたててうづまれけり。末代に此都を他国へうつす事あらば、守護神となるべしとぞ御約束ありける。されば天下に事出でこんとは、この塚必ず鳴動す。將軍が塚とて今にあり。

桓武天皇は都が長久たらんことを祈念し、土で八尺（約二五三センチ）の人形を作り、鉄の鎧甲を着せ、弓矢を持たせて、東山の峰に西向きに立てたま埋めたが、末代に平安京を他国へ移すことがあったなら、それを阻止するための守護神となるようにと約束した。そのため、天下に何かが起こらんとするときにはこの塚は必ず鳴動するという。

これを漢文縁起本『清水寺縁起』と比較すると、所持物や鳴動する点等で共通するが、前者の場合は西向きに立てて埋めたのに対し、後者では城東に向かつて立てて埋めている点が異なる。¹⁹なぜこうした違いが生じたのか考えると、田村麻呂墓の場合は、稻荷山を越えた平安京の南東に位置しているため、平安京の東玄関の方向、すなわち北西方向を向いているとするのに対し、東山の「將軍塚」の場合は、その場所自体が城東であり、平安京全体を見渡すことができることから、その場所から西の平安京を見守り守護していると改変されたのではないだろうか。すなわち、田村麻呂墓の伝承をもとに「將軍塚」の伝承が作成されたものと思われる。そして田村麻呂墓の存在があいまいになつてくると、「將軍塚」に鳴動の役割が取って代わられたのである。²⁰

「將軍塚」という名称自体、征夷大將軍坂上田村麻呂からとられたも

のであるが、場所が東山に移ると田村麻呂が意識されることは次第に少なくなつていった。

それでは、田村麻呂の伝説化はいつから行われるようになったのだろうか。それを明確に示すことはできないが、九世紀後半から十世紀ごろには『田邑麻呂伝記』が成立していたことが裏付けられ、十一世紀中葉には清水寺創建に関して田村麻呂が重要な役割を果たしていることが描かれることから、比較的早い時期から伝説化が行われていたと言えよう。そして、平安末期の前九年の役、後三年の役といった陸奥での乱により田村麻呂が再び想起され、頼朝の奥州平定により確立化されていったのではないだろうか。

源頼朝が奥州平定を終え、陸奥国伊沢郡鎮守府の八幡宮で奉幣した際、そこは田村麻呂が東征のために下向したときに勧請崇敬した靈廟であつて、田村麻呂が所持していた弓箭や鞭等が奉納され、それらは宝蔵に保管されていて、頼朝はことさら欽仰したことが『吾妻鏡』文治五年（一一八九）九月二十一日条に記されている。また、九月二十八日条には以下のようにある。

御路次之間、令臨一青山、給被尋其号之處、田谷窟也云々、
是田村鷹利仁等將軍、奉綸命征夷之時、賊主惡路王并赤頭等
構塞之岩屋也、其巖洞前途、至于北二十余日、鄰外浜也、坂
上將軍於此窟前、建立九間四面精舍、令模鞍馬寺、安置
多聞天像、号西光寺、寄附水田、

藤原利仁は延喜十五年（九一五）に鎮守府將軍となつた人物で、『鞍馬寺縁起』では下野国の高蔵山一帯の群盜を討つたとされる人物である。田村麻呂と利仁などの將軍が征夷に赴いた際、賊主の惡路王や赤

頭などが立て籠もつたのが田谷窟すなわち達谷窟で、田村麻呂はこの窟の前に九間四面の精舍を建立して西光寺とし、鞍馬寺を模して多聞天像を安置したという。

このように、平安末には田村麻呂は蝦夷平定をなした偉大な將軍として想起される存在となつていた。それを同じ征夷大將軍の源頼朝が伝承地を訪れることにより、田村麻呂の伝説化はよりいっそう深化することになったのである。『公卿補任』弘仁二年（八一二）条には田村麻呂に関して、「此人身長尺八寸、胸厚一尺二寸、毘沙門化身、來護我國云々」とあり、田村麻呂は毘沙門天の化身とされている。毘沙門天（多聞天）は北方の守護神であることから、北方の蝦夷を平らげた田村麻呂と重ね合わされていったのだろう。

三 鈴鹿峠と田村麻呂との結びつき

それでは、田村麻呂と鈴鹿峠とはいつ結びついてくるのだろうか。正徳五年（一七一五）に刊行された井沢蟠龍『広益俗説弁』では以下のように記している。

俗説曰、伊勢国の鈴鹿姫は鬼女なり。田村鷹、これを妻とす。没後、神と祝ふ。今の鈴鹿社、これなり。

弘安元年勅使記曰、「鈴鹿山、鈴鹿姫座坂頭之北辺」。世伝曰、「坂上田村麻呂奉勅征此山鬼女、且相婚而女自伏罪就囚。献之朝、亦逃入山、後田村麻呂追到為夫婦。其鬼女是鈴

鹿姫也」。

田村麻呂は鬼女である鈴鹿姫を妻とし、鈴鹿姫が亡くなった後は神として祀ったのが今の鈴鹿社であるという。そして『弘安元年勅使記』に曰くとして、鈴鹿山には鈴鹿姫が坂頭の北辺に鎮座していることを記し、世に伝えて曰くとして、田村麻呂は勅命を受けて鈴鹿山の鬼女退治に向かい、これを妻とすると女は自ら罪を認めて囚われの身となり、田村麻呂は朝廷に献上した。しかし再び山に逃げ入り、後に田村麻呂は追いかけていつて夫婦となり、その鬼女は鈴鹿姫であるとの説を引用している。

『弘安元年勅使記』は存在せず、おそらく『弘長元年十二月九日公卿勅使記』のことを指すのだろう。そこには以下の記述がある。

一、路次事

伊勢国

鈴鹿山

坂西寄、近中津人可出参、坂以東寄、伊勢守人可参御迎也。

同山内、凶徒立所

加治口坂西山口、普立烏帽子在所辺也、件立烏帽子奉仕者、鈴鹿姫等、鈴鹿山北辺也。

御坂尻。

已上両所、要害之難所也。殊可レ有用意敷。

盗賊の現れる場所として、鈴鹿山内西山口の加治口坂があげられており、ここは普立烏帽子の在所があったあたりで、今は立烏帽子を神として崇めていて、そこには鈴鹿姫を祀っているという。そしてそれは東海道近くの北のあたりだという。加治口坂とは現在の蟹ヶ坂のことだろう。この記述からすると、鈴鹿姫を祀っている社は甲賀市土山の、現在田村神社となっている場所にあったものと思われ、立烏帽子の神

と鈴鹿姫とは別の存在だったことがわかる。

ところで、ここには田村麻呂の記述が見られない。すなわち十三世紀中葉には田村麻呂と鈴鹿峠との結びつきはまだ行われていなかったとみなしてよいだろう。田村麻呂が鈴鹿峠と結びついてくることを確認できる史料の登場は、室町時代になってからである。『太平記』²⁶巻第三十二「直冬上洛事付鬼丸鬼切事」には以下の記述がある。

此太刀ハ、伯耆国会見郡二大原五郎太夫安綱ト云鍛冶、一心清淨ノ誠ヲ至シ、キタヒ出シタル剣也。時ノ武將田村ノ將軍ニ是ヲ奉ル。此ハ鈴鹿ノ御前、田村將軍ト、鈴鹿山ニテ剣合ノ剣是也。其後田村丸、伊勢大神宮へ参詣ノ時、大宮ヨリ夢ノ告ヲ以テ、御所望有テ御殿ニ被納。其後摂津守頼光、太神宮参詣ノ時夢想アリ。「汝ニ此剣ヲ与ル。是ヲ以テ子孫代々ノ家嫡ニ伝ヘ、天下ノ守タルベシ。」ト示給ヒタル太刀也。サレバ源家ニ執セラル、モ理ナリ。

鬼切という太刀は、伯耆国の大原五郎安綱という鍛冶が打ったもので、時の武將田村麻呂に奉られた。そして田村麻呂は鈴鹿山で鈴鹿御前と剣合わせのときにこれを用いた。その後田村麻呂は伊勢神宮へ参詣の際これを奉納したが、源頼光が参拝した際、源家に代々伝えて天下の守とするため汝に剣を与えろとの大神の託宣があり、その後源家に伝えられたと記されている。ここで鬼切の太刀を介して田村麻呂と頼光との結びつきが見られることが注目されるが、この点は後に述べたい。このように話が大きく展開していくのは、室町時代のことである。

応永二十五年（一四一八）八月に足利義持が参宮した際の記録である『耕雲紀行』²⁶になると、さらに詳しく記されている。

あふミと伊勢とのさかぬハ、はやすゝか山のうちなり。さかしき
いはほ、大行の陰も思やらるゝミちわけくたりて、こなたをハ坂
のしたといひて、宿屋一むらあり。むかしもこゝをとをりしに、
このたひハことに老のかすにうちそへたる、やまひのなこりいと
くるし。

むかしよりなをかすまさる年こえてくるしきおいのさかのした
ミち

これよりこの山のうちはるゝとわけゆくに、むかし鈴鹿姫勇力
にほこりて、この国をわつらハしき。田村丸に勅して誅罰せられ
しに、すゝかひめいくさやふれて、きたりけるたて^(立烏帽子)を、山
になけあけゝる、石となりていまもあり、ふもとに社をたてゝ、
巫女などこれをまつるなり。陽台の神女ハ、朝には朝雲となり、
夕にハ行雨となると、楚王の夢にミえしを、それも廟壇をのこせ
り。淫祠の烹宰多劫の罪報のかるへからず。これをすくハむため
に一首を回向す。霊これをうくへしやいなや。

雲となり雨とはならてすゝか山なに山ひめのあとのこすらむ
そのあたりの木のすかた、石のたゝすまひ、仙境もかくやと覺て、
行すきかたき山のけしき也。

心なきいは木とのミそおもふらんわかミる色を人にミせはや

鈴鹿山では盜賊の鈴鹿姫が人々を困らせていたため、田村麻呂に勅命
が下されて誅罰を加えた。そのため鈴鹿姫は敗れて、着けていた立烏
帽子を山に投げあげたところ、それは石となつて今も残つており、麓
に社を立てて巫女などがこれを祀っているとす。

また、応永三十一年（一四二四）十二月に足利義持が参宮した際の

記録『室町殿伊勢参宮記』²⁷には以下のようにある。

夜あけぬれば坂の下につきぬ。そのあたりちかき所に、御ひるの
御まうけありて、御とうりうのよしきこえ侍るを、しばしやすら
ひ侍にき。此所よりはすでにいせの国にて侍ぞかしと、いつしか
神にちかづきたてまつるを、たのもしき心地し侍て、

神も見よ君が千とせの坂のしたこえて伊勢路にかゝるはじめを
すゝか川をわたり侍るに、ながらへぬる身のかひありて、御もと
にまうづるうれしき、一かたならぬ心地して、なを行すゑのたの
みさへ侍るもおほけなし。

ふりはてゝ又もこえはやすゝか川もしも八十せにかゝる身なら
は

鈴鹿姫と申す小社の前に、人々祓などし侍るなれば、しばし立よ
りて、心の中の法樂ばかりに、彼たてゑぼしの名石の根元もふし
ぎにおぼえ侍て

すゝかひめおもき罪をばあらためてかたみの石も神となるめり
この記事でも、鈴鹿姫という小社の前で人々が祓をしている姿が描か
れている。恐ろしい盗人が神として祀られることで善神に転化し、そ
の大きな力で逆に旅人を守護すると考えられたのである。奈良絵本『す
ゝか』²⁸でも、

すゝかのたてゑぼしは、すゝかのこんけんといはゝれて、とうか
いたうのしゆこ神となり、ゆきゝのたひ人の身にかはりてまもり
給ふ、このみちをゆく人は、その身のさいなんをまぬかれ、

とあり、立烏帽子が道中を行く人の守護神となつてゐる。『弘長元年
十二月九日公卿勅使記』の段階では、立烏帽子は神として鈴鹿山の西

山口に祀られていたが、室町時代になると鈴鹿峠にある目立つ岩が立烏帽子の岩とされるなど、伝説化が進んでいく。

ところで、これらの記述には立烏帽子のことは記されていても、田村麻呂については記されていない場合があることに気がつく。また、『弘長元年十二月九日公卿勅使記』にも田村麻呂は登場しない。よって、鈴鹿峠には盗人立烏帽子に関する言説がまず最初にあり、その上に征夷大將軍として著名な田村麻呂が退治したという伝承が付け加わったと考えるのが最も素直であろう。

鈴鹿姫については、ここでは深く触れないが、もとはおそらく鈴鹿の山の神を鈴鹿姫と称していたのではないだろうか。そのため、峠の東西および峠上に祀られていたのだろう。それが女盗賊と結びついたリ、斎王群行が鈴鹿峠を越えるようになって、初代の伝説的斎王とされる倭姫命を鈴鹿姫とみなして祭神とするようになっていったと推測される。

峠上には田村神社が鎮座していて、近世の地誌類にもその名が見られるが、明治四十年（一九〇七）に片山神社と合祀され、神社のあった場所には「田村神社旧跡」と刻まれる石柱が立てられることとなった。そしてその近くの旧東海道南側の茶畑からは、数多くの土師器片と若干の須恵器片が発見されており、ほとんどが祭祀用の小皿で、生活具としての土器はほとんど見あたらない状況であることから、この場所は、旅人が旅の安全を願って手向けた峠神祭祀の遺跡と推定されている。²⁹

峠の遺跡としてよく知られているのが東山道の信濃国と美濃国の国境にある神坂峠である。神坂峠からは有孔円板・剣形・白玉などの石

製模造品、土師器片、須恵器片などが出土している。峠には石が集められた簡単な祭壇が設けられ、その前で人々は土器・陶器などの品物を神に捧げ、ここまでの旅の無事、残してきた家族の無事、これから先の旅の無事を峠の荒ぶる神に祈願し、捧げた品物を神に捧げた証として周辺の石を利用してそつと壊し、その後土器や陶器は行き交う人々や馬に無意識に踏まれ、より小さくなっていったとされる。³⁰ 鈴鹿峠でも細くなった土器片が発見されていることから、神坂峠と同様な峠祭祀が行われていたと推測される。そして、神坂峠の場合は山と里との境に神坂神社が鎮座しており、これから峠を越えようとする人、また峠を越えてきた人の信仰をあつめたことから、鈴鹿峠も同様に東西の鈴鹿社において旅人の信仰をあつめたといえよう。

そして、立烏帽子を投げ上げて石となったとされる石は、近くにある三重県指定天然記念物の「鈴鹿山の鏡岩」を指すとみなされるようになった。この石は珪岩で、縦二・二m、横二m、断層が生じる際に強大な摩擦力によって研磨されて平らな岩面が鏡のような光沢を帯びるようになったが、たき火により延焼したり採石者のために傷つけられたりすることにより光沢を失ったとされている。³¹

鈴鹿姫を祀る神社は、峠の東の伊勢側にもあった。近年火災のため焼失してしまった亀山市関町坂下の片山神社である。片山神社は式内社とされ、倭比売命・瀬織津比売神・氣吹戸主神・速佐須良比売神、それに村内の社を合祀した坂上田村麿命以下五柱を祀っていた。³² そして鈴鹿大明神・鈴鹿御前・鈴鹿権現と通称されたが、江戸中期頃には片山神社と呼ばれるようになった。神社明細帳によれば、片山神社はもと三子山の中央の峰に鎮座したが、斎王群行の際に休息する鈴鹿頓

宮古宮に遷座し身曾貴殿に坐す祓戸大神と合殿に斎奉つたが、仁和年中（八八五・八九）火災により片山神社及び祓戸大神を三子山に移した。また永仁二年（一二九四）に野火により神殿などが焼失したが、神霊は灰燼の中に顕然としていた。よつて多津加美坂の間鈴ヶ嶽の麓を宮所と定めて切り開き、神殿を造営して片山神社・祓戸神等を合殿に遷して後、片山神社鈴鹿大神と称えて坂下の氏神となつたと伝えられている。片山神社に田村麻呂が合祀されるのは明治になつてからで、それ以前は鈴鹿姫を祀る鈴鹿山麓の神社と認識されていた。

鈴鹿峠での田村麻呂伝説とは別に、甲賀市土山町に鎮座する田村神社では、田村麻呂が祀られるようになった由緒について違う説明をしている。³⁵ 天文十年（一五四一）四月十七日にさまざまな記録や先祖からの言い伝えをもとにまとめられたとする「近江州甲賀郡頓宮之牧土山郷正一位高座田村神社・鈴鹿神社縁本記」³⁶の部分を示すと以下のとおりである。

抑高座田村神社と申奉るは、正三位大納言兼右大將征夷大將軍坂上宿禰田村麻呂の霊社なり、武勇にすぐれ給ひ、朝敵をほろほし給ふ事数度の軍功なり、常に少彦名命を尊敬し給ひ、御出陣の折節は少彦名命の小尊像を甲の上に戴給ふ、此は人皇五十二代嵯峨天皇の御宇に平城天皇ハ奈良に坐し、右兵衛督藤原仲成ハ妹尚侍薬子といへる後のすゝめによつて、都重祚の御心ざし坐て、都を奈良に遷さんとのたまふ、依之公卿詮議ましまし、天氣おたやかならず、藤原仲成³⁷妹の薬子をからめ捕て我國のさわきを鎮よと勅ありけれども、平城帝の御后薬子と云近臣の仲成なりにつれハ、天下大にさわぐ、既に仲成が軍勢鈴鹿山を切ふさゝ

往來を留ム、依之嵯峨天皇田村將軍に朝敵退治の宣旨を下シ給ふ、田村將軍勅定を請給ひ、今度の軍は夷狄征罰の軍と違、平城と都との御あらそひなれハ家身の大事此時なりとて、御身を清メ下加茂御祖皇太神宮の神前に参籠ましまし、ふかく御祈誓をなし給ふ、ふしぎの神驗を得給ひ、御喜悅ましまして都をうつたち給ふ、

此事山城国加茂の社の縁起にも委ク見へたり、又俗説に云、東山清水寺觀音へ参詣ありて立願なされたりと云ならハし侍れとも、古記ともに不見、是ハ慥に童どものあやまりと見へたり、

夫より鈴鹿山に至給ひ、朝敵をほろぼし給ひ、天下安全に納給ふ、其後弘仁二年³⁸とし五月廿三日に御寿五十四歳にて隠給ふ、主上甚惜せ給ひ、種々の賜物ありて、宇治の郡栗栖村に葬しめ給ふ、勅詔によりて甲冑劍鉾弓矢を棺の中へ入れて、王城の方へ東向に立て土葬ス、然るに其秋より天下大に疫病流行て万民罷る事夥し、殊に五畿内近江・丹波・播磨の者ともハ、大分損したりけれバ、博士をめてして卜定ありけるに、是ハ田村將軍鈴鹿山におゐて退治し給し賊徒の執心たりをなすなるへし、鈴鹿山の風を請たる国々すくれて病人夥なりと申上たりけれハ、又博士をめてして卜定の上、鈴鹿山の西なる二子山の峯に田村將軍の神籬を建て鈴鹿山より吹來る風をふせぎとゝめ給ふ、其冬より神社を建立の御催あり、明弘三³⁹年春正月十八日遷宮ましまし、初て厄除の神事を行給ふ、夫より忽疫病おさまりて、万民無病の安堵を得たり、其時より無退転今に毎年厄除の神事を執行事、天下太平国土安穩国家

繁盛無病延命の遺法なり、其後二子ノ峯の神社今の神社の岸に流れて留給ふ、神職氏子のめんく驚さわひでもとの峯に祭鎮め奉りしに、ほとんどなく又流来て此岸に留り給ふ、又もとのことく二子ノ峯に鎮祭奉しに、又程なく此社の岸に流来りとゞまり給ふ事、已に三度に及ぶ、神官村民等神慮をはかりかね奏聞をへたりしに、大内より御尋有けるハ、此岸に田村將軍の由緒ばしありやとたつね給ふ、神職村民等申上けるハ、此所ハまさしく田村將軍御出陣の折からハ、いつも此鈴鹿社の森の内に陣とり給ふ事、御初陣より以後の吉例となし給ふ、御出陣の御陣場にて御座候へハ、若ハ神の御心もこゝに留給哉と申上けれハ、扱ハ疑なく此所に神籬を建べしと弘仁十三年^{壬午}夏卯月八日に鈴鹿社と一つ所に勧請し給ひて、其後御編旨に正一位高座田村大明神と下されける、

これによると、菓子の変に際し、坂上田村麻呂は嵯峨天皇の命で鈴鹿峠に向かい、藤原仲成軍を滅ぼしたが、田村麻呂の亡くなった弘仁二年（八一）秋、天下に疫病がはやり、それは田村麻呂が鈴鹿山で退治した賊徒の執心が祟りをしているとのことだったので、鈴鹿山の西にある二子山の峰に田村麻呂を祀る神社を建立して鈴鹿山から吹き下ろす風を防ごうとした。そして弘仁三年正月十八日に遷宮を行い、厄除神事も行ったところ、疫病は治まった。神社は当初二子の峰にあったが、現在の地に流れて来たため元に戻したが、また流れて来るということが三度起こった。流れ着いた場所は田村將軍が出陣のときに陣をとった鈴鹿社の森であり、田村麻呂はここにとどまりたいということで流れ着いたのだらうということで、弘仁十三年（八二二）四月八日に鈴鹿社とともに祀ることになったと記している。この内容につい

ては『近江国輿地誌略』にも簡略化して記されている。

現在田村神社で行われている厄除大祭（田村まつり）はこの由緒に基づくものである。文中にある「二子山」は現在どの山を指すのか不明で、あるいは三重県側の「三子山」のことかとされるが、田村神社に残される絵図では、田村川の上流黒川のほとりに「二子塚」が描かれていることから、三子山とは別で、土山の田村神社は鈴鹿峠上の田村神社とは異なる由緒を語っている。

しかし、『伊勢参宮名所図会』では鈴鹿山に出没する群盗を田村麻呂が鎮めたことから田村麻呂を祀る神社を土山に建てた旨記し、『近江名所図会』では菓子の変を鎮圧し、群盗を鎮めたためと異なる由緒を記していることから、由緒については一定せず錯綜していたようである。史書には田村麻呂の群盗退治の話は見られないため、『続日本紀』に見える菓子の変での田村麻呂と鈴鹿との関わりをもとにして由緒が作成されたのではないだろうか。そこには神社をより一層権威づけ、中央との結びつきを強くしようとする意図があったものと想像される。

田村麻呂のころの東海道は倉庫道で、甲賀から杣川をのぼり、伊賀国柘植を通って加太越をして鈴鹿関に入るというルートだった。そして、仁和二年（八八六）に東海道は阿須波道となり鈴鹿峠を越えるようになる。その前から鈴鹿峠を越える道があったことは確かだが、官道となるのはこのときからなので、田村麻呂が東海道を通ったとしても、鈴鹿峠を越えることはなかったと思われる。ゆえに、弘仁十三年に阿須波道沿いの現在地に社殿を建立したとする社伝をそのまま信じることができない。田村麻呂を祭神として神社に祀るようになるのは、

田村麻呂信仰の高まる室町時代とするのが妥当ではないだろうか。ただ、神社自体はおそらくその前から鎮座していただろう。それは鈴鹿山の山神の里宮としてであって、鈴鹿山を越えようとする旅人が幣を手向けた社ではなかっただろうか。鈴鹿社として社伝に見られるのがそれに相当する社であろう。

ところで、甲賀市には同じく田村麻呂伝承を持つ櫛野寺がある。寺伝によると、延暦十一年（七九二）最澄が根本中堂の用材を得るために杣庄に來た際、靈夢を感じてこの地の櫛の木に一刀三礼して刻んだ十一面觀音を本尊とし、延暦二十一年（八〇二）坂上田村麻呂が夷賊討伐のため、杣ヶ谷を櫛野まで登ってきたとき、鈴鹿の山賊に苦戦したが、櫛野觀音の力により山賊を平定することができたため、櫛野寺を祈願寺と定め、大同元年（八〇六）七堂伽藍を建立、自ら等身の毘沙門天像を彫刻して安置したという。

美術史からの検討によると、本尊の十一面觀音像は十世紀半ばころの作、毘沙門天像はそれよりもさらに時代が下るとされているので、櫛野寺の伝承も田村麻呂信仰の高まりとともに形成されていったのではないだろうか。

四 酒吞童子説話との関連

先に『太平記』卷第三十二「直冬上洛事付鬼丸鬼切事」の記述に、伯耆国の大原五郎安綱という鍛冶が打った太刀が田村麻呂に奉られ、

田村麻呂は鈴鹿山で鈴鹿御前と剣合わせのときにこれを用い、その後伊勢神宮へ奉納され、次に源頼光に授けられ、この太刀は鬼切と称されたとあることを記したが、「しゅてん童子」説話にもこの話は登場する。

「しゅてん童子」説話は、現存するものとしては逸翁美術館蔵『大江山絵詞』が最も古いとされ、その成立の上限は応安七年（二三七四）と考えられている⁴⁰。逸翁本は他の諸本とは本文を大きく異にし、田村麻呂が登場する部分は欠けているため不明である。その後、室町時代後期から江戸時代にかけて、謡曲、御伽草子、古浄瑠璃、歌舞伎など、さまざまな分野で「しゅてん童子」は取り上げられ、広く人口に膾炙した。

その中で、慶応義塾図書館蔵絵巻『しゅてんとうし』⁴¹は室町物語「しゅてん童子」諸本の中ではやや早い時期の制作と考えられており、ここに田村麻呂も登場するので、『太平記』の記述と比較検討してみたい。慶大本の頼光の太刀に関する記事は以下のとおりである。

太刀は、ちすいと申て、太神宮より給はりたる、てうほう也。この太刀と申は、むかし、さかの天わうの御とき、さかのうへのしやうくん、田むらまろ、ほうきのくに、ゑみのこほりの住人、おほはらの五郎大夫やすつなどいふ、めいよのかちをめして、うたせられし、つるきなり。田むらまろ、この太刀を、もつてすゝかのこせんと、つるきあわせ、し給ひぬ。又、ぎやくしん、たかまろを、たいらけ、給ひてのち、伊勢太神宮の、御ほうてんに、おさめらる。そのうち、よりみつ、さんくう、し給ひつるとき、太しん宮、なんち、このつるきをもつて、てうかを、しゅこしたて

まつれと、あらたに、御たくせんまし／＼、夢中に、さつけ給ふなれば、しんりよをあふぎ、今度、このけんをそもたれけれ。

『太平記』では頼光の郎党渡辺綱が大和国宇多郡大森で妖者の腕を切り落とし、その後源満仲が信濃国戸隠山でまた鬼を切ったことにより「鬼切」と呼ばれた太刀であったが、慶大本では田村麻呂が伯耆国の大原五郎安綱に太刀を打たせ、その太刀で鈴鹿御前と剣合わせをし、また逆臣安倍高麿を平らげた後に伊勢神宮に奉納し、その後頼光が参宮したとき神託があつて授けられた太刀を「ちすい」と記している。そして藤原保昌が信州戸隠山で変化の者を従えた太刀を「くわいけん」とし、別物の太刀としている。このことについては、『太平記』では時代錯誤の矛盾となつてゐる満仲の件について、慶大本では頼光と保昌の太刀を別物とし異なる銘を与えることで解決しようとしたのではないかと推測されている。⁴³

それはともかく、太刀を介して坂上田村麻呂と源頼光が結びつけられていることを指摘しておきたい。両者の背景にはそれぞれ鈴鹿御前と「しゆてん童子」があり、さらにその背後には鈴鹿山と大江山がある。前者は東海道における都と東国との境、後者は山陰道における都と西国との境であり、そして両所とも盗賊が跋扈していた。頼光とともに酒吞童子退治に関わつた藤原保昌の弟が先に述べた盗人として著名な保輔であり、立烏帽子とともに並び称される盗人で、ここでも両所が関係している。こうしたことが、『太平記』において両所をつなげる叙述につながつていったのではないだろうか。「しゆてん童子」説話の成立過程は、大江山や伊吹山に限って考察するのではなく、鈴鹿山との関わりから再考されるべきであろう。

おわりに

伝説は後世の人間が興味本位で史料を集めることによって作り上げられるわけではない。伝説を作る背後には、それを作らなければならない必然的動機があつたはずであり、われわれは製作の意図をしつかり解読しなければ伝説の本質を理解することはできない。

それでは、鈴鹿山に田村麻呂を関連づけて、鈴鹿姫を退治したとある話の背景は何であろうか。それは、鈴鹿山を通行する旅人を煩わせていた盗賊の問題であつたに違いない。田村麻呂と鈴鹿峠との関わりが見られるようになった室町時代には、鈴鹿峠に盗賊が出没しており、幕府は交通の安全を図るため、山中氏に対して警固を命じたことは一度ではなかった。そうしたとき、「朝敵」を平定した古代で最も著名な征夷大將軍坂上田村麻呂を祀る神社が現地に建立され、鈴鹿峠の盗賊を退治したという伝説が作り上げられることによって、現在問題となつてゐる盗賊の鎮圧を願つたと推測される。そして、その話が『太平記』に収録され、またさまざまな文学作品として描かれることにより、多くの脚色を加えられていった。

現地での伝説化と都での作品化、この両者が相まって伝承が形成されていったのではないだろうか。

1 『室町時代物語大成』所収。

2 清水寺史編纂委員会編『清水寺史 第一巻通史(上)』(法蔵館、一九九五年) 参照。

3 『謡曲大観』参照。

4 東北地方における田村麻呂伝承については、堀一郎『我が国民間信仰史の研究(一)』(創元社、一九五五年)に詳しい。

5 坂上田村麻呂と鈴鹿峠との関わりについては、大川吉崇『鈴鹿山系の伝承と歴史』(新人物往来社、一九七九年、(新書版)伊勢文化舎、二〇〇三年)、定村忠士『悪路王伝説』(日本エディタースクール出版部、一九九二年)などの論考がある。本稿執筆に際しては特に金子恵里子「鈴鹿御前・立烏帽子を巡る伝承世界」(『伝承』二、二〇〇六年)を参考にさせていただいた。

6 『新日本古典文学大系』所収。

7 月本直子・月本雅幸編『宮内廳書陵部蔵本寶物集總索引』(汲古書院、一九九三年)所収。

8 『保元物語・平治物語・承久記』(新日本古典文学大系)所収。

9 『新校群書類従』第六巻所収。

10 保輔は『今昔物語集』などに見える盗賊の袴垂と同一視されるようになり、袴垂保輔とも称されるようになった。

11 『日本古典文学大系』所収。

12 金子氏前掲論文。

13 『中世法制史料集 第一巻鎌倉幕府法』(岩波書店、二〇〇一年)所収。

14 『三重県史 資料編 中世一(下)』(三重県、一九九九年)所収。

15 坂上田村麻呂の生涯については、高橋崇『坂上田村麻呂』(吉川弘文館、一九五九年)などを参照。

16 吉川真司「近江京・平安京と山科」(上原真人編『皇太後の山寺』柳原出版、二〇〇七年)

17 清水寺史編纂委員会編『清水寺史 第三巻史料』(法蔵館、二〇〇〇年)所収。

18 『続々日本絵巻大成 清水寺縁起・真如堂縁起』(中央公論社、一九九四年)所収。

19 「城東」という語に関しては解釈が分かれている。東すなわち陸奥の方向とするもの、平城京の方向とするもの、平安京の東とするものの三つである。漢文縁起本『清水寺縁起』の場合、「城の東を向く」と読むのが素直な読み方であり、「城」で平城京が平安京のどちらかを指す。当時の都は平安京であり、平城京の方向を向く意味はあまりないと言える。また、『平家物語』では土人形が「東山の峰に西向き」に埋められ、平安京を見守っていることから、田村麻呂は平安京の東の入り口の方角を向いて平安京を見守るように埋葬されたと解釈するのが妥当であろう。

20 『山槐記』治承二年(一一七八)六月二十三日条では、東方で鳴動があったのに対し、「或曰將軍墓云々、十二度鳴之、後日又或曰、山階御陵云々、無一定」とあることから、このときの鳴動は山科側、すなわち田村麻呂墓からの鳴動と考えられたようである。十三世紀初頭までには、田村麻呂「將軍墓」から東山「將軍塚」へ鳴動が移ったと考えられる。『保元物語』では保元の乱の予兆として將軍塚がしきりに鳴動したことを記すが、これがどの將軍塚かは記していない。また『太平記』巻第二十六「洛中の変違並びに田染棧敷崩るる事」にも貞和五年(八三八)二月二十六日夜半に將軍塚が鳴動し、虚空に兵馬の馳せ廻る音が半時ばかりした明くる日の午の刻、清水坂から出火して本堂などが焼失したことを記しているが、ここでも將軍塚がどこか記していない。しかし、「墓」と「塚」との表記の違いからすれば、これらは東山將軍塚の鳴動と解される。

21 西野山古墓が田村麻呂の墓と比定されるまでは田村麻呂の墓所は不明で、明治二十八年の平安遷都一一〇〇年祭のときには京都東山区栗栖野にある墳丘が墓所として整備された。

22 毘沙門天と田村麻呂との結びつきについては、西川明子「東北地方における毘沙門天像と田村麻呂伝説の関連について」『藝叢』一六、一九九九年）などの論考がある。

23 『東洋文庫』（平凡社）所収。

24 『神道大系 神宮編三 伊勢勅使部類記・公卿勅使記』所収。

25 『日本古典文学大系』所収。

26 『神道大系 文学編五 参詣記』所収。

27 大神宮叢書『神宮参拝記大成』所収。

28 『室町時代物語集』一所収。

29 関町教育委員会編『関町史』上巻（関町役場、一九七七年）

30 市澤英利『東山道の峠の祭祀・神坂峠遺跡』（シリーズ「遺跡を学ぶ」〇四四）（新泉社、二〇〇八年）

31 『名勝旧蹟天然記念物調査書』（三重県）

32 式内社の片山神社は論社となっており、坂下と古厓に所在地が推定されている。

33 式内社研究会編『式内社調査報告 第七巻東海道二』（皇學館大学出版部、一九七七年）

34 三重県神社庁所蔵の明治期および大正十三年の神社明細帳の両方とも同内容の由緒を語っている。

35 『伊勢参宮名所図会』には江州甲賀郡の田村大明神の社の項に「昔は此辺りより坂の下までは鈴鹿の山中にてあしりゆへに、今も猶惣名は山中といへり、嶺と山口ニヶ所に祭るも其義しかり」とあり、嶺と麓に田村神社があることについて、両者が山神であったことを暗示している。

36 田村神社所蔵。現存するものは慶長二十年（一一一五）五月に書写された旨、奥書に記されている。

37 『史蹟、名勝、天然記念物、基本調査報告』史蹟ノ部第一輯（三重県神職会、一九三九年）の「田村神社跡」の項には、「土山村の田村神社祭神及縁起が本村片山

神社と殆んど一致せるは維新後坂下村片山神社書類及田村神社書類を宇峠の住人井筒屋某なる者貧窮に陥り前記土山村の田村社へ売却したるによる現に片山神社縁起の後半は行方不明の儘にして副本を以て代用せり（佐野国松私見）元、土山村田村神社社掌の一子土山盛齋嘗て語を曰く田村神社の縁起は全然坂下の鈴鹿神社の縁起なり宜しく就て一見すへしと吾之れを片山神社社掌若林氏に告く行きて一覽を土山田村社司田村徳光に乞ふ許されず而して田村社縁起に田村神社一名鈴鹿神社と云ふ云々とあり正に前記の事実なるを証するに足らんか（佐野国松私見）」とある。井筒屋が土山の田村神社へ書類を売却したかどうかはわからないが、縁起を見る限りでは片山神社・田村神社の縁起をもとに土山の田村神社の縁起が作成されたとは思えない。

38 甲賀市史編さん委員会編『甲賀市史 第一巻古代の甲賀』（甲賀市、二〇〇七年）高梨淳次執筆部分。

39 『土蜘蛛草紙・天狗草紙・大江山絵詞』（続日本絵巻大成二六）（中央公論社、一九九三年）所収。

40 高橋昌明『酒呑童子の誕生』（中央公論社、一九九二年）

41 『室町時代物語大成』第三巻所収。

42 源満仲（九一三・九一七）のこの方が源頼光（九四八・一〇二二）よりも前なので、『太平記』の記述は時代的におかしい。

43 池田敬子「しゆてん童子」の説話」（説話と説話文学の会編『説話論集 第八集 絵巻・室町物語と説話』清文堂出版、一九九八年）

〔付記〕本稿執筆に際し、三重県神社庁、田村神社宮司田村英治氏、大川学園理事長大川吉崇氏には大変お世話になり、この場を借りてお礼申し上げます。また、二〇〇七年十一月十五日に伊勢湾熊野研究会で報告した際、貴重な意見を下さった皆様に厚くお礼申し上げます。

（やまだ ゆうじ 三重大学人文学部）